

「徳育（心の教育）を考える」

吉田 順一

―若い真摯な教育集団・生徒保護者会での「教育談話（平成十年）」の

一部より抜粋―

この国の教育は、今後一体、何から子供たちに教えるべきかということがいろいろな場で論じられています。その時、必ず「心の教育」ということがとり上げられ、そのためには道徳教育（徳育）―道徳心の有る情操豊かな人間性を養うための教育―が特に大切であることが、これまでの教育の反省としてとり上げられるようになってきています。

道徳心を子供たちにつけさせることの大切さは、今に始まったことではありませんが、学校で子供たちに道徳を教えるだけで道徳教育が出来るということではなくて、その前に、子供たちが育っている私たち大人社会こそが、先ず道徳、倫理を取り返さなければならぬ現状に直面しているわけですから、徳育というこ

とは実際には時間のかかる大切な教育作業の一つです。

しかしいかに難しい問題であるからといって、どうしても学校という場で、道徳を子供たちに教えることが焦眉の大事な問題であることは、いま多くの心ある人々が真剣に考えていることだと思えます。

IT革命に始まり、経済機構の変革、グローバルゼーションという、波浪の中で、とにかく急がねばならない、後れをとっては負けるといふあせりの激流に翻弄され、その方式のみ先走りして、それらを社会に生かし適応させなければならぬ大人が、「道徳」「倫理」という社会の根幹である土壌を失くしてきているために、考えてもみなかったこの国の荒廃と混迷をひき起こしてきていることは、今更かさねて繰り返すこともない現状です。

しかし、そうだからと言って、もうどうにもならないと言葉もなくただ悲観に立ち尽くすだけでは、大人としての責務を逃れることになってしまいます。

では一体どこから手をつければよいのだろうかーと、その現状に正対し、この国の教育を立て直し、安心で平和に生きられる社会・国家を子供に残すために、勇気を持って努力を積み重ねて行くのだという意欲をもつことが、今この国の教育に携わる者としての責務です。

学校教育の中でも「道徳教育（德育）」ということこそ、最優先されなければならない切迫した課題であることは。心ある人々は考えているはずです。

ここでは「中等教育」というごく狭い範囲での「德育」という具体的な作業を取り上げてみたいと思います。

昔からある時代までは、この国では「道徳」ということは、言葉の深い意味は別として十歳前後になると漠然と教わっていたように思います。私たちが小学生の頃には道徳は“修身”という言葉に置き換えられたりもしていました。それは学校の修身の時間に習う言葉からだけでなく、家族とか周りの大人たちの日常の言葉や行動から自然に教えられる躰のようなものでした。

道徳とは―ということ、改めて教えられたり聞いたりすることがなくても、日常の生活習慣の中で自然に教えられていたと思います。道徳という言葉は使われなくても、家族や学校で、行動、作業、心の持ち方という日常の生活の中で日々教えられ、ごく基本的なことは、少しずつ身につけていたわけです。少なくとも、古き良き時代の日本という国では、大人もそういうものを身につけていたことを、当時日本に来た外国人が、いろいろな書物に称賛して書かれていることを、読まれたことがあるかと思えます。

一般的に云つて、今この国では「道德」とか「倫理」という言葉を改まつて聞くと、それだけで、何かある種の「堅苦しさ」とか「窮屈（きゆうくつ）さ」のような感じを受ける人が多いのではないでしょうか。それは、人間は元々何物にも束縛されなく自由に気楽に生きたい—という本能的なものを持つているからだと思います。自分の考え方や行動を、一つの決まった型にはめられるのは、何となく拘束されているような気がして、深くそのことについて考えることもなく、道德という言葉そのものを堅苦しく感じ、漠然とした違和感を持つているのかも知れません。中には、この思いが深まって、道德という言葉から少し逃げ腰になつたり、何か違和感のようなものを持つたりする人々がいるかも知れません。

つまり道德という言葉が、表面的に「何々してはいけない」「こうしなければならぬ」というようにすべて自由を縛つてしまふということだけに受け取られるところに、道德というものを学んだりすることへの、若干の違和感が、現代人の道德観の中にあるのではなからうかと考えられます。

しかし、よく考えてみますと道德はそのように人間生活を抑制するものではなくて、文明社会ではそこに生活する人が守らなければならぬ「法律」というものが表面に一つの層となつており、その下に道德という層があつてはじめて健全

な社会という土壌が築かれ、この二つのものが互いに有機的に機能することで、私たちが生きる社会の秩序が保たれ、人々が安心して生活できるようにすることは、少し考えれば誰もが理解できることだと思えます。

ここで道徳という言葉を、因みに辞書を見てみますと、次のように書かれています。

——人々が善悪をわきまえて正しい行為をなすために、守り従わねばならない規範の総体。外面的物理的強制を伴う法律と異なり、自発的に正しい行為へと促す内面的原理として働く（大辞林）——このように書かれています。

表現が難しいので一応参考にしていただければよいと思いますが、要約すれば、道徳というものは——人間がこの社会で安心して暮らしてゆくために、どうしてもなくてはならないルール・決まりであって、これを守ること、初めて人間が、人間として価値のあるものとなることができるもの——ということになるかと思えます。このように考えてみますと、道徳（倫理）ということとは、それほど堅苦しく人間の行動を縛りつけるものではないことがわかってくると思います。

確かに、ある場合道徳は、私たち人間が本能的に持っている自由、本能のおもむくままに行動しようとする欲求を抑えたり、そこからくる行動を規制したりす

ることはあります。それは人間が、ほかの動物とは違って高度な文明社会を構成しており、その集団の中で生活し暮らしているからです。

深山幽谷に野生動物のように住んだり、大海の孤島に一人で生活したりするのであれば別ですが、普通の人々は、人と人が集まって社会を作りお互いに支え合って生きるわけですから、自分の欲望だけ満足させ、自分勝手に思うがままに生きるということになれば、自分も周りの人々も一日も生きられなくなることは明らかでしょう。

このようにして私達人間が生活している文明社会は、根柢の基盤となるところに長い間かかって私達の祖先から伝えられてきた習慣とか慣習というような道徳があります。そしてそのしつかりした基盤の上に、その道徳というものを基準、つまり物指しとして色々と細部に亘ってとりまとめられた、法律というものが作られているわけです。

これが人間社会での道徳のおこりだと考えれば誰にも理解できると思います。そしてこの道徳を基準として法律がつくられ、その法律が守られて初めて自分たちが安心して暮らすことができる—そうすることで本当の自由が得られるということ、人間は段々と進化するにつれて他の動物より考えることができるように

なったということが、人類が生き延び進化してきた理由の一つに違いありません。この地球上で、生き残ってきた、他の動物にない人間の持つ叡智の中から、自然発生的にこのような取り決めが生まれ、それを守り育ててきたからこそ、人類は万物の霊長と言われるようにここまで進化してきたのです。

道徳は、決して人間の自由を妨げるものではなくて、私達が真の自由を享受するためには、なくてはならぬ大事なものとなるわけです。

アメリカで一九九三年に出され、欧米で膾炙したと言われる「The book of Virtues (W・Jベネット)」という本の中でこの通俗的、普遍的な誰にでも分かり易い徳目として次のようなものが挙げられています。

- 一． 自分に厳しくなる (自己規律)
- 二． 人にやさしくする (同情)
- 三． やるべきことを成し遂げる (責任感)
- 四． 友達を大切にする (友情)
- 五． 一生懸命働く (仕事)
- 六． 困難に立ち向かう (勇氣)
- 七． つらさを乗り越える (忍耐)
- 八． 素直な心を持つ (正直)
- 九． 誠意を持ち続ける (忠誠心)
- 十． 神を信じる (信仰心)

この徳目はとても分かり易く、昔から日本でもすっと教えられてきたものです。この様な一見平凡な徳目を、教室で日々子供たちにくり返し伝えること

から、まず「德育」を始めなければならぬと考えます。

日本では、儒教（孔子・孟子）の教えや仏教が、道徳教育で教える徳目の基となつてきているわけですから、道徳ということ自体の説明も難しく、そして実際に学校現場で道徳をどのように具体的に教えるかということも、德育の難しいこととなつてきているようにも思います。

こうして道徳は、ずっと昔からその社会に伝わってきたもの、つまり習慣や慣習のようなものに始まり、日常の社会生活の中で守らねばならない、「具体的な取り決め」のような複雑なものに進み、しかもそれらは人間が生活する社会によつて異なっているものもありますし、さらにそれらをまとめた、抽象的な法律やそれに近いものにまで広く深く多岐にわたるものとなつてきたわけです。

このために、その定義も一元的なものでは不十分であり、さらにこの道徳を教えるということになると、実に困難な、考えるだけ高度なものである事がわかってきます。

道徳ということの、ごく表面の輪郭を考えてみるだけでも、このように深遠なものであり、さらにこの道徳を学校現場で教えるとなると、いかに難しく、そして大切なことであるかということがわかります。

古代ローマの哲学者セネカ（ストア派 前四〜後六五・道徳を説き実践哲学を主張）は、「徳は教えられない」と言ったと聞きますが、道徳ということの深い哲理を知る思いがします。

これは、道徳は教える事が出来ないという事ではなくて―道徳は、人間が生きる上で欠くことの出来ない大切なものであるし、人間が身につけなくてはならないものであるが、その徳目をただ言葉によって伝え、教えるということだけではなくて、むしろその道徳を教える者の道徳心、道徳的な行為行動の実践によって、はじめて道徳を教わる者に伝わり、感化する事が出来るものである―という訓えだと考えれば、教師は先ず自分が道徳を学びその徳目を身に付ける事から始めねばならないという教訓である、と受け止める事が出来るわけです。

ここで、現在学校で行われている道徳教育について見てみますと、二〇〇八年の時点で学校での道徳教育の時間は、小学校、中学校には「道徳という時間」として学習指導要領で定められたものがありますが、高校には定められた単位としての時間はありません。

中学一年生で年間三四時間（週一時間）、小学二年生〜中学三年生で三五時間がカリキュラムの中に取り入れられています。その教育内容は、各学校で選定され

た副読本を使って道徳を教えるということになっていきます。高等学校では正式に学習指導要領に決められた道徳という教科はなくて、「道徳教育は学校でなされる教育活動全体を通じて行う」というようになっていきます。

高校では「公民」という教科の中で担当教員が道徳に関するような事も教えているのが実情のようです。

このような事を考慮した上で、徳育として学校現場で教師が出来得ると思われる事は、本質的な事から言えば、すべての教師が先ず生徒に物事を教えるという仕事の基幹となる教師としての「基幹教育力」を培う事であると私は考えています。この基幹教育力ということは、自分の教える教科の知識、それを子供達に理解させる技術を充分身につける事です。

教壇に立つからには、勿論教師としてそれらは身につけた上で教職に就いているわけですが、更にその上に、経験を得て分かってくるのですが、教えるための知識、技術はいくら研究しても尽くせないものがあるはずですが、

授業を受ける生徒が、この先生は一生懸命教えてくれる。――この先生の授業はよく分かる。この先生は、どんな質問にも答えられる力を持っている――という教師が、生徒にとって大切な基盤となるものです。

教師は、生徒にとってどのような存在であるように努力する教師が、よくできる子、できない子、やる気のある子、ない子——どのような子供にも、真正面から向き合い、それぞれに知識、技術をつけるために、真面目に、誠実に、忍耐強く一生懸命に努力する姿——この事自体から徳育という事が始まるわけです。

この教師の仕事に対する姿そのものが人間性の感化であり、それが道徳教育の一つの柱となるものです。道徳の徳目を言葉で教える前に先ず道徳教育には、このような教師の在り方自体がどうしても大切な事になってきます。

こうして子供たちに、学習への歓び、意欲を引き出すと共に、勉学への希望を引き出そうとする真摯な姿は単なる知育ではなくて貴重な徳育とも云えるわけです。その上で子供たちから信頼されている教師が、道徳という事を、常識として人間社会になくはない普遍的な徳目として、書物で体系的に教える時間が、中学・高等学校の教育においてなくてはならない徳育の作業です。

人間として何が正しくて、何が正しくないのかという事から始まって、物事の価値観、守るべき規範という事を文字や言葉でもって教える事がともに行われなければなりません。その為には、高校でも週一回は「道徳」の時間を設定し普遍的な「道徳」教科書を作成し、生徒たちに必修させることです。

このようにして学校での徳育の一面は教師が真剣に生徒に学力・知識をつけるという事にもあるわけですから、知育も道德教育も学校現場では根底において一つのものになってくるのです。

アメリカで出版された一冊の本に「EQ」という言葉が使われています。

これは一九九五年にアメリカのD・ゴールマンという心理学者が著わした、英語の原題は「EMOTIONAL INTELLIGENCE why it can matter more than IQ」という書物が全米でベストセラーとなり、これが日本語に翻訳されて「EQ 心の知能指数」(土屋京子訳・講談社)の書題で出版され日本でもベストセラーとなって非常に多く読まれました。「EQ」は、この書物から使われ始めた言葉です。

こうして「心の教育」ということと深くつながるものとして、この「EQ」という言葉が取り上げられていましたが、道德教育という事を考える時に、ここで改めて取り上げてみたいと思います。

もともとこの本は当時流行語だった「IQ」と対比させるために「Emotional Intelligence Quotient」として「EQ」という言葉を使い、「心の知能指数」としたようです。

ところでこの Emotional (エモーションナル) という語は「感情の・情緒の」とい

う意味ですから、外からは見えない心の分野の「情感とか感性の知能、理解力、思考力」という事を指しています。このようにこの書物に述べられている教理は、日本民族がずっと長い間、持ち続け、それらを根底において、この国を創り上げてきた道徳や倫理の徳目に相通するものがありますから、この本を手にして、人々はどこかに置き忘れていた大切なものを、外国の書物からふと思ひ起こしたのではないでしようかーその為に非常に多くの人々に読まれたのだと思います。

心の知能指数だと説く「EQ」の根幹となるものは、「情動の自己認識（自分自身の気持ちがかかっていること、その能力）であり、それが次にその感情をうまく制御して正常な状態にいつも保つこと（自制）が出来る能力である」と説かれています。

確かにこのような能力は、徳育を考える時とても大切なものであり、教師として現場で仕事をして子供たちを見ている者にはよく理解できることです。深く共感するものです。

EQ論はさらに具体的に次のようなものを習得することであると分かり易く説明されています。

（一）情動の自己認識・自分が心に受けた衝動をコントロール・抑制する能力

(二) 自利愛他主義・他人に対する理解、共感

(三) 人格的知性・自分自身の人格、品性

(四) 社会的知性・規範、倫理、道徳を習得し集団の中で調和し協力し合う能力
となります。

これを見ますと、日本の社会でも昔から「知徳一体・情理円満」ということが人「徳育」の究極の理想として伝えられてきましたが、まさに相通するものがあります。著者の主張されるように、人間に身につけなければならない基本的な倫理・規範はE・Qの基盤の上に成立しているものである事を理解すれば、モラル（道徳）という言葉は使われていなくても、見方を変え言葉を変えて、道徳を易しい言葉と表現で教えていることがよく分かります。

アメリカの、碩学の心理学者から日本古来の「徳育」というものの価値を、言葉と表現を少し変えて、あらためて伝えられる思いがします。